

筑波大学附属視覚特別支援学校

入学試験サンプル問題

高等部

普通科・音楽科

国語

ページ数 22

設問数 5

※サンプル問題の出題はあくまでも例であり、

問題数や形式は本試験と異なる場合があります。

※解答例の公表はおこないません。

※サンプル問題の出題内容に関するご質問には一切

お答えできません。

一次の文章は森鷗外^{おうがい}著「高瀬舟」の、役人の庄兵衛^{しょうべえ}が島流しになつ

た罪人の喜助^{きすけ}を舟で島へ送っていく場面である。島流しにされる罪人

は、ふつう泣き悲しむものなのに、喜助はどこか楽しげな様子でいる。

庄兵衛は不思議に思い、その理由を喜助に問いただした。その続きである次の文章を読んで、後の問一く六に答えよ。（三十点）

庄兵衛は今、喜助の話を聞いて、喜助の身の上を我が身の上に引き比べてみた。喜助は仕事をして給料を取っても、右から左へ人手に渡してなくしてしまうと言った。いかにも哀れな、気の毒な境^{きょうがい}界である。し

かし一転して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に、果たしてどれほどの差があるか。自分も上からもらう扶持米^{*1 ふちまい}を、右から左へ人手に渡し

て暮らしているにすぎぬではないか。彼と我との相違は、いわばそろば^①んの桁が違っているだけで、喜助のありがたがる二百文に相当する貯蓄だに、こっちはないのである。

*2

さて桁を違えて考えてみれば、鳥^{*3}目二百文をでも、喜助がそれを貯

*3 ちょうもく

蓄とみて喜んでいるのに無理はない。その心持ちは、こっちから察してやることができる。しかし、いかに桁を違えて考えてみても、不思議なのは喜助の欲のないこと、足ることを知っていることである。

喜助は世間で仕事を見つけるのに苦しんだ。それを見つけさえすれば、^A

② のり

骨を才^{すく}しま^ずに働いて、ようよう口を糊^{のり}することのできるだけで満足した。そこで牢^{ろう}に入ってから、今まで得^うがたかった食が、ほとんど天

B

からサズけられるように、働かずに得られるのに驚いて、生まれてから知らぬ満足を覚えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違えて考えてみても、ここに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知った。自分の扶持米で立ててゆく暮らしは

おりおり足らぬことがあるにしても、たいてい出納が合っている。手いっぱいの生活である。しかるに、そこに満足を覚えたことはほとんどない。常は幸いとも不幸とも感ぜずに過ごしている。しかし心の奥には、

こうして暮らしていて、ふいとお役が御免になったらどうしよう、大病

*4

にでもなったらどうしようという疑懼ぎくが潜んでいて、おりおり妻が里方

*5

さとかた

から金を取り出してきて穴埋めをしたことなどがわかると、この疑懼が

意識の^{しきい}閾の上に頭をもたげてくるのである。

いったいこの懸隔はどうして生じてくるだろう。ただうわべだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こっちにはあるからだといつてしまえばそれまでである。しかしそれはうそである。よしや自分が独り者であつたとしても、どうも喜助のような心持ちにはなられそうになり。この根底はもっと深いところにあるようだと、庄兵衛は思った。

庄兵衛はただ漠然と、人の一生というようなことを思つてみた。人は身に病があると、この病がなかったらと思う。その日その日の食がないと、食つてゆかれたらと思う。万一のときに備える蓄えがないと、少しでも蓄えがあつたらと思う。蓄えがあつても、また、その蓄えがもっと

多かつたらと思う。かくのごとくに先から先へと考えてみれば、人はどこまで行つて踏み止まることができるものやらわからない。それを今、目の前で踏み止まって見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は気がついた。

庄兵衛は、今さらのように驚異の目をみはつて喜助を見た。このとき
④ *フムムム
庄兵衛は、空を仰いでいる喜助の頭から毫光が差すように思った。

庄兵衛は喜助の顔を守りつつまた、「喜助さん。」と呼びかけた。今

度は「さん」と言ったが、これは十分の意識をもつて称呼を改めたわけ
*8

ではない。その声が我が口から出て我が耳に入るやいなや、庄兵衛はこ
⑤

の称呼の不穏当なのに気がついたが、今さらスデに出た言葉を取り返す
ふおんとう C

こともできなかった。

注

- * 1 扶持米^{ふちまい}．．．武士の給与として与えられた米。
- * 2 二百文．．．当時の旅館一泊分程度の金額。
- * 3 鳥目^{ちようもく}．．．当時の銅銭の別名。
- * 4 疑懼^{ぎく}．．．疑って不安に思ふこと。
- * 5 里方．．．実家。
- * 6 意識の閥^{しきい}．．．意識と無意識との境。
- * 7 毫光^{ごうこう}．．．仏から放たれる光。
- * 8 称呼．．．呼び名。

問一 傍線部A、Cのカタカナを漢字に改めよ。

- A オしまず B サズけられる C スデに

問二 傍線部①「そろばんの桁が違っている」とはどういうことか。

二十字以内で説明せよ。

問三 傍線部②「口を糊^{のり}する」とあるが、この語句の意味として、最

も適当なものを、次のア、エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 黙ってじっと耐える イ 世間と付き合う

ウ 養う人数を減らす エ 何とか生計を立てる

問四 傍線部③「彼と我との間に、大いなる懸隔のあること」について、「懸隔」とはへだたりのことであるが、それはどのようなへだたりか。四十字以内で説明せよ。

問五 傍線部④「喜助の頭から毫光こうこうが差すように思った」とあるが、庄兵衛がそう感じた理由を三十五字以内で説明せよ。

問六 傍線部⑤「庄兵衛はこの称呼の不穩当ふおんとうなのに気がついた」とあるが、「この称呼」が「不穩当」である理由を、三十字以内で説明せよ。

二 大学の入学試験について書かれた次の文章を読んで、後の問一～七に答えよ。(四十点)

① 点字による試験問題の内容は、一般の試験問題と基本的に同じですが、点字が表音文字であることにより、漢字に関する問題では別の問題の用意、字数制限のある問題では修正や代替が必要になる場合があります。また、点字で表すことのできるスペースの制限や、触覚^アによる認知の特性から、図表を用いた出題では、その表し方には多くの場合特別な配慮が必要です。解答において図示を求めている問題でも、配慮が必要です。

このように、試験問題を点字にするということは、問題を機械的に点字に置き換えるのではなく、点字による等価値の問題^②を作成する作業で

あるといえます。入試問題を点字にすることを、入試点訳と呼んでいますが、入試点訳では、正確な点訳であることに加え、盲学校（視覚特別支援学校）での教育をふまえた点訳であること、さらに、厳密、公正、秘密の保持のもと、各大学の入学試験の独自性が尊重され、その出題の意図に沿った点訳であることが必要です。

A

入試点訳は、試験当日の早朝から大学構内で行われるのが通例ですが、事前に作業が行われることもあります。限られた時間内で正確な点訳を

*1

行う必要があるため、通常、一名の受験生に対して十名程度の点訳者が必要です。同じ科目の受験生が複数あっても点訳の手間と時間はほとんど変わりません。

④

、図版に関しては、手作業が多いため、部数に

応じて手間と時間がかかることがあります。

点訳作業に入る前に、問題作成上、特に配慮を要する事項等について出題者と点訳者の間で十分に検討する必要があります。特に、漢字に関する問題や、図表などの提示や解答方法に工夫が必要な場合は、検討作業に大変時間がかかることがあります。また、点字問題に対応した解答の書き方や注意事項も点字で作成します。

*2

点字試験は、受験上の配慮として時間延長が認められているため、試験時間がずれますので、点字試験の受験生は試験終了まで一般受験生とは隔離され、別室で試験が行われます。

解答用紙は、通常の点字用紙を用います。解答用紙と下書き用紙の区

別はせずに配布し、試験終了時に受験生自身が整理して解答用紙を提出します。

回収された点字の解答は、ただちに墨字（通常の文字）で一般受験生の解答用紙に記入します。この作業を墨^⑤記^イといい、これに携^ウわる人を用いる墨^⑤記^イ者^ウといっています。点字には漢字はありませんが、墨^⑤記^イでは点字の解答を漢字仮名まじり文にして記入します。また、点^ウ記^イの際に、問題の表現の変更、問題の変更、問題の削除^ウによる問題番号のずれなどがあつた場合は、墨^⑤記^イの際に注意しなければなりません。そのため、墨^⑤記^イ者^ウには、原問題と点字問題が与えられる必要があります。正確な墨^⑤記^イのためには、点^ウ記^イに携^ウわつた人が墨^⑤記^イをすることが望ましいのですが、そうでない場

合は、点訳の際の変更部分や受験生への指示などを、漏れなく確実に墨訳者に伝えることが必要です。

（全国盲学校長会大学進学支援委員会

「シリーズ視覚障害者の大学進学１ 入学試験」

注

* 1 十名程度の点訳者・・・校正や墨訳をする人も含む。

* 2 受験上の配慮・・・学力を適切に評価するために、大学等が通常

の試験に合わせて障害に配慮した試験を行うこと。

問一 傍線部ア、ウの漢字の読みを答えよ。

ア 触覚 イ 携わる ウ 削除

問二 傍線部①「点字が表音文字であること」とあるが、そのために、どのような問題が出題された場合に一般の試験問題と同じではなくなるのか。二十字以内で答えよ。

問三 傍線部②「等価値の問題」とはどのような問題のことか。本文の内容に合っているものを、次のア、エから二つ選び、記号で答えよ。

ア 一般の問題を機械的に点字に置き換えた問題

イ 一般の問題と難易度が同じくらいである問題

ウ 一般の問題の図表もすべて点字の図で表した問題

エ 図表を用いた問題で適切な配慮がおこなわれた問題

問四 傍線部③「入試点訳」において大切なことは何か。五十字以内で

答えよ。

問五 空欄④に入る接続詞として適切なものを、次のア～エから一つ
選び、記号で答えよ。

ア 順接 イ 逆接 ウ 転換 エ 累加

問六 傍線部⑤「墨訳」とあるが、正確な墨訳のために必要なことは
何か。三十字以内で答えよ。

問七 傍線部A「入試点訳は、試験当日の早朝から大学構内で行われるのが通例ですが、事前に作業が行われることもあります」とあるが、これについて、次の(1)(2)に答えよ。

(1) この文には二通りの入試点訳の方法が書かれている。それぞれの方法を箇条書きで書け。

(2) あなたは(1)で挙げた前者と後者のどちらの方法がよいと考えるか。理由を含めて五十字以内で述べよ。

このページに問題はありません。次のページに進んでください。

三 次の古文を読んで、後の問一、六に答えよ。(十四点)

* 1

もろこしに翁^{おきな}ありけり。かしこく強き馬をなむ持ちたりける。^①

②

* 2

③

これを人にも貸し、我も使ひつつ、世をわたるたよりにしけるほどに、

* 3

④

* 4

⑤

この馬、いづちともなく失せにけり。聞きわたる人、いかばかり

* 5

⑥

嘆くらむと思ひてとぶらひければ、つゆも嘆かざりけり。

(「古今著聞集」
ここんちよもんじゆう)

注

* 1 もろこし・・・中国。

* 2 世・・・世の中。

* 3 いづちともなく・・・どこへということもなく。

* 4 聞きわたる人・・・ずっと聞いていた人。

* 5 とぶらひければ・・・たずねたところ。

問一 傍線部①「持ちたりける」の主語は何か。文中の語で答えよ。

問二 傍線部②「使ひつつ」を発音通りにひらがなで書け。

問三 傍線部③「たより」のこの文章での意味を、次のア～ウから一つ
選び、記号で答えよ。

ア 手紙 イ 知り合い ウ 手段

問四 傍線部④「失せにけり」とあるが「失せた」ものは何か、答えよ。

問五 傍線部⑤「いかばかり」を現代語訳せよ。

問六 傍線部⑥「つゆも嘆かざりけり」の現代語訳として最も適当なも

のを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 少しも嘆かなかった イ たぶん嘆かないだろう

ウ だれも嘆かなかった エ ひどく嘆いたそうだ

四 次の①②④の文の中から、それぞれ後のかつこ内で指定する品詞をすべて抜き出せ。(八点)

- ① ずっと前から欲しかった物をもらった。(助詞)
- ② この店に行くにはどうやって行けばいいですか。(副詞)
- ③ 大きな川の向こうに巨大な山がそびえている。(形容動詞)
- ④ 思いを伝える活動を通して、考えが変わってきた。(動詞)

五 次の①②④は慣用句である。それぞれの意味が「・・・する」の形になるように、例にならって「・・・」に当てはまる漢字二字の熟語を答えよ。(八点)

(例) 腹をくくる

(意味) 覚悟する

(解答) 覚悟

① 腕が上がる

② 手を結ぶ

③ 爪に火をともし

④ 折り紙をつける